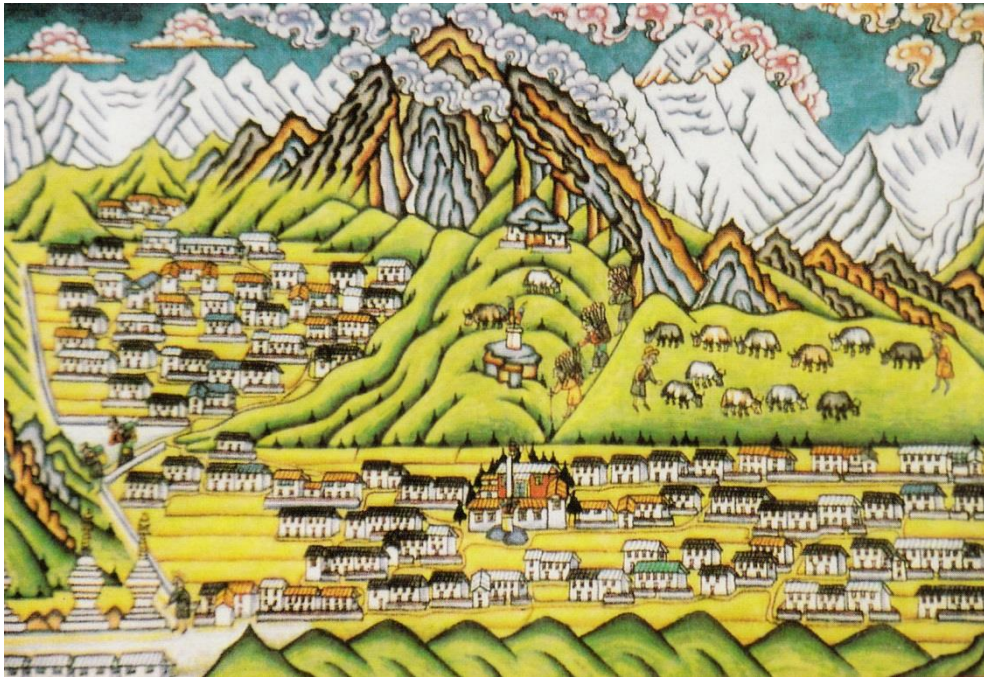


初めてのヒマラヤ

雲表のネパール ゴーキョ・ピーク 道中記

2004年4月～5月



(シェルバ族の集落・クムジュンとヒマラヤの峰々。現地絵葉書より)

紫雲棚引く宮居の奥で、乳母、爺や、執事、家庭教師、侍従、幫間、大奥ノ局などなど数多の取り巻きにかしづかれて育った深窓の貴公子(と思いたいが、実は田舎の山奥で水呑み百姓の子として泥にまみれて育ちつつ、汚い布団の中で夜半ふと目覚めて、ご落胤のお伽草紙の主人公に我が身を置き換えて想像を逞しくしているうちに、夢と現が渾然一体となって、世が世ならひよとして尊い血筋のお公家様ではあるまいかと・・・)は、一生に一度で良いから、そのようなお大尽遊びを実現してみたいものと思いつつ、永年逆の立場の宮仕えに終始し、齢六十路を越えてしまった。

その夢が、まさかこんな形で実現しようとは夢にも思わなかった。毎朝起きればすぐに寢床まで顔を洗う洗面器の湯を持ってきてくれる。それからモーニングティーがきて、やおら食堂に顔を出すと茶、メイン、フルーツ、コーヒーのフルコースの朝食が各自に給仕される。旦那衆はどっしりと座して喰いたい物をアゴで注文すればキッチンボーイが恭しく捧げ持って来るのである。トレッキングの道中は重い荷物は全てポーターに担がせて、旦那衆は水筒とカメラだけの蟬のように軽いサブザックで軽々と歩を進めれば良いという寸法。

昼食もコックが全てその都度フルコースを作ってくれる。また、3時頃になればその日の泊まり場に先に着いて炊事の準備を始めたコックが茶を沸かし、ポーターが態々ヤカンとカップを持って引き返して来てサービスしてくれるのである。夜は夜で、これまたフルコースのディナーを作ってくれ、おまけに湯たんぽまで配ってくれるという塩梅。何しろ、旦那衆 16 人に対してガイド 5 人、その他ポーター、コック、ウウェイターを含めて 25 人もの従者が付くのであるから、現代版の大名行列であろうか。花魁衆を引き連れて歩けなかったのが残念といえば残念であるが、平均年齢 60 数歳の旦那衆とオナゴ衆のパーティーであるから、これは無理というもの。是非にもという輩は、宿場宿場で床屋の二階に上がる手もあろう。

さて。

ヒマラヤ通で都岳連個人会員のKさんがネパール・ヒマラヤのトレッキングを企画し、個人会員と彼の属する山の会のメンバーを集めてゴーキョ・ピークのトレッキング隊(16人)を組み立てた。参加を宣言した我が家では、例の鬼共が「つい3ヶ月前にアコンカグアから帰ったばかりではないの？ 老齢の田舎の両親をほったらかしにして1年間に2回も海外登山に出掛けるとは一体何様の了見？ いやいや、今年の暮れにも密かに3回目のアコンカグアを企んでいるようだから、1年間で足掛け3回にもなるワヨッ。留守中の両親に万が一のことがあったら一体全体どうするお積もり？ たいが〜いにシナサイ!!」。平素から家族に信用ゼロの濡れ落ち葉のワタクシ奴としましては五体投地の如く平伏して「左様、左様、全く以て仰せのとおりにござります。しかし、しかしながら、・・・今回は・・・今回のヒマラヤは・・・でござりますれば・・・、何卒ご裁可を頂きたく伏してお願い申し上げ奉り・・・ムニャムニャ・・・」と言葉を濁して逃げ切るしか方法がありません。

マア、このくらいの苦労は、初めて見るヒマラヤの屋根 8000m 峰の展望に比べれば別にド〜ってことはない。Kさんの尽力で通常の日本からのツアーの半値で行けるのであるから、せっせと拝み倒して何とか鬼共のご裁可を取り付けて、4月21日深夜の関空から飛び立ったのでございました。

日本からのカトマンズ直行便(上海でトランジットするが)は関西国際空港から週に1便ロイヤル・ネパール航空が飛んでいるだけである。ロイヤル・ネパールはしょっちゅう欠航するそうであるが、今回も出発直前になって欠航となった。噂によると、機材整備が充分でなくしょっちゅう故障するとか、航空ガソリンを買う金がないとか言われているが、真相は予約客が少ない場合は欠航となるらしい。こんなことでは国際社会に通用する筈もないが、ひょっとしてIATAにも加盟していないのではなかろうか。代替え便として12時間遅れのタイ航空に差し替えられたが、お蔭で空港傍の全日空ホテルに無料で宿泊させて頂き、豪華なディナーまで頂戴した。このような5星クラスに泊まれる幸運は滅多に無いから、ロイヤル・ネパールを恨むどころか大感謝と言わなければならない。

そのタイ航空機でプーケット/バンコクを経由してカトマンズのトリブヴァン国際空港に着陸、Kさんが手配しておいたガイドのディリップ・タパとアシスタントガイドのナバラジ・ポーデルの出迎えを受けてカトマンズ市街のホテルに入った。カトマンズの下町は狭い道路に車、ミゼット、バイク、人力車、自転車、歩行者、はては牛までが行き交い、その警笛と排気ガスと埃の喧騒は只事ではなかった。バイクが非常に多い。10分も歩いていれば、頭痛がしてくるくらいだ。何という楽器かは知らないが簡単な手作りの弦楽器やイカサマらしい仏像を売る男が何人かしつこく付いて来て日本語で「コレ安イヨ。安イ。300(ルピー)。幾ラ?、幾ラ?(なら買うか)」と煩い。

下町のターメル地区には低層のレンガ積み商店が犇きあっていて、ゴチャゴチャとした印象であった。仏像・仏画、絨毯(これは主にチベット系)やTシャツなどの土産物屋も多い。また地元庶民のための食料屋(野菜果物、肉、香辛料、穀物)や雑貨屋、金物屋なども区画によって仕切られているようである。銀行、両替屋、ツアーリスト、トレッキングガイド、本屋、レストラン、ホテルもピンからキリまで犇っている。(観光については後述)。

ポーデルの案内で下痢止めの薬(日本山岳会のHさんが是非これだけはカトマンズで買って行けと勧めてくれたEldoperという名の黄色のカプセル。激しい水便状の下痢でも直ぐ治るとのこと。小生は幸いこのお世話にならずに済んだが、下痢に苦しんだ他の人々を助けることになった)、地図、ミネラルウォーターなど最低限の必需品を買い込んで早々にホテルに引き上げる。初めてのカトマンズの夜は、



(カトマンズの街角)

投宿したホテルの直ぐ横の登山者がよく行くというレストラン(Rum Doodle とかいった)でガイド二人を交えて顔合わせの夕食。二人とも日本語はペラペラで、ディリップはKさんとは旧知の仲。日本にも来たことがあり、鹿島鏈に登ったり、文部科学省の立山登山研修所で研修を受けたこともあるらしい。ナバラジも日本で1年間ほど働いていたという。

ホテルに帰ってから一人でロビーのバーを覗いてみた。オーストラリアから、生徒をヒマラヤトレッキングに連れてきたという音楽の先生と意気投合してまたまたセルベッサを呑み過ぎた。

翌朝、カトマンズ空港から16人乗りの双発セセナ機(正確にはソ連製の古いポンコツ・イリュージン)でクーンブ・ヒマールの登山基地になっているルクラに向かった。こんな小さな飛行機にも一丁前にスチュワードのお兄さんが乗務していたが、別にこれといってする用事も無く、ただ飴を配っただけ。役立たずのお兄さんを降ろせば、もう1人分余分に運賃収入が入るのにナと考えるのは効率重視の資本主義経済に浸かり切った日本人が勝手に考えることであって、この国では利潤よりも安全を重視していると考えerべきであろうか。

カトマンズ盆地を離陸すると直ぐに山にさしかかる。山の天辺まで小さな棚田が重なるように作られていて、まさに「耕して天に至る」の景観であった。飛行機は狭い谷に沿って斜面を嘗めるように右左に飛ぶから、気流に翻弄されて揺れること夥しい。飛行機嫌いの小生は、昨夜の宿酔いも手伝って殆ど死んだも同然の態。僅か40分の飛行時間が10時間くらいに感じられた。心ノ臓が停まって本当に死ぬかと思った。緊張で掌と額からは流汗滝の如しで、窓から見える真っ白なヒマラヤ連山の神々しい光景を見る余裕などは微塵もなかった。

ルクラ空港は、猫の額ほどの狭い斜面に作られた空港で、200mばかりの滑走路も急坂の斜面に作られており、そこに登坂するような形で着陸する。離陸もこの坂を一気に下ってハンググライダーよろしく浮き上がるのである。空港でディリップが予め手配していたポーター(ガイドとコック長はカトマンズから同行するが、ポーターやコック、ウェイターなどは現地ルクラで雇う仕組みになっているらしい)に荷物を振り分けていよいよトレッキングに出発である。

ポーターは客人の荷物全部と一切の食材、鍋釜、燃料を背負うから、結構な目方であろう。竹で編んだ尖底土器様のカゴに荷物を縛りつけ、これを額ベルト(英語で言う tumpline)で支えて運ぶのである。頑強な人は80kg以上も担ぐそうである。ルクラから奥は車道が無いから、車などというシロモノは一切無く、日常用品でも何でも運搬は全て人やゾッキョ(牛)の背に頼っている。一般的な相場は、担ぎやすい物でRs10(ルピー、以下同様)/kg/day、担ぎにくい物でRs15だそう。1Rs=1円50銭ほどだから、1日の稼ぎは~1000円ほどである。カトマンズの平均的なサラリーマンの月給が3~5万円ほどだから、マアマアの稼ぎかも知れない。ポーターの大体は破れズボンにゴム草履か破けて指が出たような靴を履いており、裸足の人もいる。中には綺麗な



(猫の額の急坂に作られたルクラ空港)



(ポーター)

トレッキングシューズを履いている人もいるが、トレッカーが置いて行ったものであろうか。

小学生くらいの小さな子供までポーターをしており、我々の感覚から言えば気の毒な気もするが、しかし、これはこれで彼らの生まれついた生業であり、そのために身体も頑丈になり、将来ガイドへの道も開けているのであるから、第三者がとやかく言うのは彼らの文化と価値観への侮蔑であろう。文化人類学でいう「文化相対主義」に基づいて付き合う必要がある訳だ。

ルクラからマニ石やらメンダン(マニ石を並べた石垣)が所狭しと並んでいる狭い宿場街の路を抜けて行くと、左下に長閑で豊かそうな緑の段丘の田園が広がっている。学校や民家も畠の中に点在している。チャムリカルカという所である。エベレスト街道はここから地元で「聖なる川」と崇められているドゥードゥ・コシ(“コシ”は川の意)の溪谷を下って行く。流石エベレスト街道という名前が付いているだけあって、1~2時間毎に集落があり、ロッジも完備している。

路も良い。しかし、ここより奥の集落はシェルパ族の根拠集落であるナムチェとクムジュンを除い

ては、山腹や尾根や川岸の僅かばかりの平坦地にへばり付く様にカルカ(夏の放牧地、出作りの石小屋がある)と2~3軒の民家やロッジが建っているだけであった。

路は河床に降りたりまた山腹を巻いたりして延々とドゥードゥ・コシを遡って行く。付近の植生は松や杉などで日本の山路の風景と変わらない。途中何ヶ所かには立派な鉄製の吊り橋も架橋されている。要所要所には仏塔(チベット語でチオルテン)やゴンパ(寺)があり、マニ車を廻しながら通過する。経文を印刷した幟や旗(オボ、チベット語ではタルチョ)、マニ石、メンダンは至る所にある。このような場所は地元の人が聖地と考えている所で、峠や山頂、大きな滝、水場などである。大きな露岩などにも仏陀の事跡を説教する碑文が彫刻されていて(マニ石)、ナバラジによると、「オム・マニ・ペメ・フム」(蓮華に座っている神々様)と刻んであるそうだ。碑文はどれも皆同じ文面であった。このような仏塔やマニ石は右手でマニ車を廻しながら左側を通過するのが決まりである。左手は不浄の手であるから左手を触れさせないため

ある。また、宿場の道端には腰丈くらいの石垣が積んであって、ベンチの样になっている。ポーターがここに荷を立てかけて休むための椅子である。この辺りの家は内部の造作は質素であるが、壁や屋根は石積みで精巧に仕上げられてあり、柱や窓枠だけが木造である。家の入り口には汚れてはいるが、ネパール(チベット?)意匠の一枚物の織物が垂れ下げてある。

ルクラからドゥードゥ・コシ川の左岸山腹をゆっくりゆっくり歩いて5時間ほどで河床に降りて、今日の宿場パクディンに到着。ここは数軒のロッジがある集落である。Taki Tashi Lodge という旅籠に投宿。ルクラの飛行場はドゥードゥ・コシ川の河床よりかなり高い斜面の標高約2800mにあり、ここは上流ではあるが標高2600mの河床であるから、標高で200mほど下ったことになる。

旅籠の前には小さいながらも本屋があって、登山のガイドブック、ヒマラヤ登山の歴史物や地図も売っていた。日本でいえば鹿島鍾の鹿島集落に本屋があるようなもので、ちょっと奇異



(マニ車を廻す)



(本屋の親子。ナマステ!)

な気がした。やはり流石ベレスト街道であろうか。

本屋は流行っているような様子もないが、玄関では若い女が小さな子供を遊ばせていて屈託がなかった。あどけない子供に“Namaste”と声を掛けたら、恥ずかしそうに小さな両手を合わせて「ナマシュテ」と返事してきた。記念に親子の写真を撮らせて貰った。街道沿いの店やロッジの主人は職業柄大体は英語を話せる。

ロッジの台所を覗いて見た。昔ながらの竈で薪を燃やしている。日本の昔と同じく吹き竹で吹いている。プロパンガスなどという物は無い。ここのガイド連中が何か泡のような物をストローで吸っていたので、試してみた。ちょっと甘酸っぱくて、ドブロクを薄めたような味である。粟を発酵させた酒で、粟粒が一杯入った器に湯を注いで吸る方式になっている。湯が無くなれば継ぎ足して5回くらいは飲める。トゥンバと言っていた。

今日はメンバーの一人 I さんの古希の誕生日で、カトマンズから隠し持って来た5本のシャンパンとワインを抜いてお祝いをした。タパが何処からか持ってきたネパールの帽子と絹布（これはネパールでお祝いの際に贈るもの）を掛けて乾杯した。コックもバースデーケーキを作って祝ってくれた。I さんは今回のパーティーで最高齢であるが、一番元気印のジイサンである。毎朝欠かさないという10kmのウォーキングが元気印の秘訣であるようだ。酒が入るに従い、タパが持ってきたネパール鼓を打ち鳴らし横笛を吹いて、ネパールダンスの饗宴と相成った。



（I さん、古希おめでとう！ 中央ネパール帽）

〔後記〕元気印だった I さんは、この5年後の2009年に急逝された。謹んでご冥福をお祈り致します）

ヒマラヤ街道のロッジはどれも似た様な作りで、寝室は通常ツインのベッドルームとなっている。マットは敷いてあるが布団は無いので持参した寝袋で寝るスタイル。個室とは言いながら、隣との壁は薄いベニヤ板1枚であるから、ナニを楽しむ向きには不都合であろうが、逆にソノ筋の好事家には好都合かも知れない。トイレは流水洗式か廁式かは別にして共同トイレがあり、またバケツ1杯の湯を掛けてくれるシャワー小屋もある。余談であるが、この辺りのトイレは大概是所謂廁式の小屋掛けで、便壺の代りに松の落ち葉が重ねてあって、その成分で匂いを消したり、分解を早めたりしている。また数は少ないが、文字どりの川屋(カワヤ、川の上の水洗式)も見かけた。山の民の知恵であろう。

重ねて余談であるが、一般のロッジの宿泊料は1室1泊100Rs程度であるらしい。パタゴニアでは結構なホテルが一人US\$10程度で泊まれたので随分安いと思ったが、ここではその1/10以下という安さである。ロッジにはミネラルウォーター、ビール(大抵はSun Mighel)、タバコ、ジュース、コーラ、簡単なビスケットなども売っている。高度によって値段は違うが、ちなみに水は缶ビールと同じ値段で100~250Rsである(カトマンズでは30~50Rs程度)。エベレスト街道にはたまに〇〇ホテルと名がついたホテルもあった。なるほど外観もロッジに比べて立派である。ここの住民は正直らしくて、ロッジクラスのくせにホテルと名乗るようなロッジは見当たらなかった。一番高級そうなホテルはシャンボチェの上、標高3800mにある日本資本のエベレスト・ビューホテルで、パンフによると素泊まり1泊US\$270、食事はディナー\$100だそう。ここではジュースを飲んだだけだが、なるほどベランダからの眺めは、雲さえなければエベレストをはじめ最高であろう。近くにあるパノラマ・ホテルは少し安くて1泊\$150。

ちょっと話が横道に逸れた。話を元に戻そう。

パクディンから先は吊橋を渡って右岸に移る。小集落ベンカールの先で吊橋を渡り再び左岸に戻る。谷の奥にチラッと真っ白い高峰が見えたがすぐに雲の中に隠れてしまった（これは後にタムセルク峰6623mと分かった）。この頃の天候は朝は晴れているが午後からは雨や霰が降り、夕方には雪に変わって

白く雪化粧するという毎日であった。

やがてモンジョという集落に至る。ここは 6000m 級の連嶺が東西に連なっている関門のような場所で、ここからいよいよヒマラヤ高地に足を踏み入れることになる。部落を登って行けば峠になっていて、ここに国立公園入山のチェックポイントがあり、カトマンズで得た登山許可証を差し出してチェックを受ける。この連嶺は西側が Kongde Ri、Chamunapalo Danda と呼ばれ、東側は Hinku Himal という名前で、ナムチェバザールから上の路で始終右側に良く見える秀麗なタムセルク峰やカンテガ峰 6685m もこの東側の尾根筋にある。この東西の尾根筋が国立公園 (Sagarmatha National Park) の南境になっている。なお、この国立公園は世界自然遺産に指定されており、ユネスコの標識もここにある。

モンジョから少し下ればジョサレで、その上流には長くて高い吊橋が架かっている。ドゥードゥ・コシ川はここで二分し、右はエベレスト源流部から流出する本流、左はターメを経由してチベットへ抜ける街道がある支流ボーテ・コシ川となる。(流域の長さでは支流の方が長い。また、右の本流は更に上部のポルツェ・テングで、我々の目的地ゴーキョから流出する本流とエベレスト方面からのイムジャ・コーラ川に分かれ、イムジャ・コーラは更に上部のペリチェで二分し、右側はローツェ氷河へ、左側はエベレストやローツェ西壁、ヌプツェ北壁から流出するヌプツェ氷河に繋がっている。何れも世界の屋根から流出する氷河である)。

やや煩瑣になったが、煩瑣の序に言えば、ヒマラヤは東西 2400km に及ぶ山脈で、日本の北海道から沖縄までの距離に相当する。この中核をなしているのがネパール・ヒマラヤで、西側からそれぞれダウラギリ・ヒマール、アンナプルナ・ヒマール、マナスル山群、ガネッシュ・ヒマール、ランタン・ジュガール・ヒマール、ロールワリン・ヒマール、クーンブ・ヒマール、カンチェンジュンガ山群に区分されている。我々の目的地ゴーキョ・ピークやチョー・オユ、マカルー、ローツェ、ヌプツェなどの 8000m 峰は何れもクーンブ・ヒマールに属しており、東西に細長いネパール国土の東方に位置している。ちなみに、「ヒマール」とはネパール語で「雪のある高山」という意味。

ジョサレの先の高くて揺れる吊橋をこわごわと渡ると、いよいよナムチェバザールへの急登となった。この尾根の途中で狭い溪谷の奥に初めてエベレストが望める場所があるが、この日は曇っていて何も見えなかった。尾根の端を回り込んで水平なトラバース路になると、前方に馬蹄形の谷筋の斜面に張りついた白い石造りの大きな集落が目飛び込んできた。ここがナムチェの集落で、シェルパ族の中心地であり、ヒマラヤ登山の黎明期から有名な所謂シェルパを沢山輩出した部落である。銀行、郵便局、映画館、インターネットカフェなどもあり、100 軒ほどの戸数が密集している。特に狭いメインストリートには多くの土産物屋、レストラン、ロッジ、登山用具店や本屋が犇きあっていた。



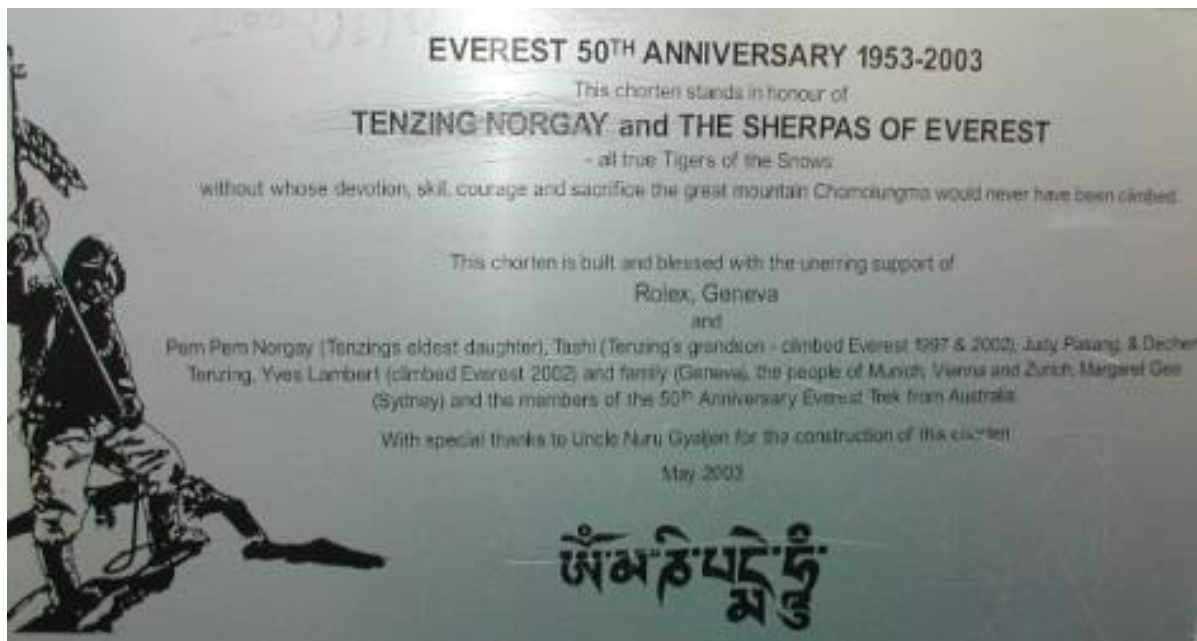
(ナムチェバザールの家並)

毎週土曜日にはバザールが開かれ、近隣の集落や、遠くはチベットからも買い物客や売り手が集まり、大層な人出となる。幸い帰りにナムチェに宿泊した朝このバザールの光景を目にすることができた。山羊、水牛、ヤク、豚などの肉を売る人、雑穀を売る人、香辛料を売る家族、衣服や靴を地べたに並べている商人、オモチャや文具や日常雑貨を並べている夫婦、少しの卵を金属の水差しに入れて客を待っている親子連れ等々。またそれを求める人たちで狭い道路は足の踏み場も無かった。ここまで歩いて出て来るには相当な日数を要しているのだろうが、皆野宿をしながら来たに違いない。



(バザール風景)

ナムチェ集落の上の丘には軍隊の警備事務所や、博物館などもあり、ここはエベレストやローツェ、またヒマラヤ前衛峰のアム・ダブラムやタムセルクの格好の展望台にもなっており、夜明け前や夕方にはカメラを構えた人が多い。エベレスト街道沿いに歩いて山の端を廻れば、そこも絶好の展望台で、ゴンパが建っており、ヒラリーと共にエベレストに初登頂したシェルパ、テンジン・ノルゲイの記念プレートが嵌め込まれていた。



ちなみに、ヒラリー卿が初登頂したのは50年前で、今回たまたまバンコクからカトマンズ行きの我々と同じ今回の飛行機に彼が乗り合わせていた。相当な高齢と思うが、今でも屢々ネパールを訪れているらしい。彼は学校を作ったり水道設備を作ったりして住民に貢献しこの辺りでは神様と崇められている。

ナムチェで泊まったロッジのオヤジはロッジの1階で登山用具店も開いていて如何にも古びたスイス銘のピッケルを売っていた。オヤジの宣伝文句によると、このピッケルは50年前にヒラリーが使用したもので、日本に持ち帰れば100倍の値が出るという。ポカラに出来た山岳博物館から譲ってくれと言ってきたが、値段が合わなかったから断ったとも言う(ホンマかいな)。言い値はUS\$300。同行のAさんが興味を示して値切ったら200迄は下がった。Aさんは100まで下がれば買うと言っていたが、そこまでは無理のようだった。小生も大いに食指が動いた。どうせ偽物には違い無く、ひょっとしてヒラリーに従ったシェルパかポーターが使った由緒ある品物かも知れないが、日本に持ち帰れば、誰も真相は分からないのだから、テンジン・ノルゲイが使用したピッケルだくらいの嘘なら通用するかもしれない。200でも余程買おうかと思ったが、骨董には何の興味も示さないウチのバアサンが、「こんなガラクタ、

一体どうするのヨッ！残った者が処分するのに苦労するから、お迎えが来る前にさっさと捨てて来なさい！」と仰せられることは目に見えているので、涙を吞んで止めにした。

翌朝は、真っ白に雪化粧したナムチェの裏山をチョー・ラ峠に向けて登る。背中に大きな荷を括り付けられたゾッキョやヤクが追い抜いて行く。ゾッキョとはヤクと牛を掛け合わせた一代限りのハイブリッドでおとなしい性格が特徴である。ヤクは3000m以上に棲息する毛の長い大きな牛で、肉としても利用されている。荷物運搬には専ら牡が使役され、雌は日がな一日のんびりと草を食みながら遊んでいるそうだが、どこやらの世界と同じであるなア。

ナムチェから登り着いた台地はシャンポチェと言い、世界で一番標高が高い飛行場がある。標高は3720m。しかし下のルクラ飛行場の付近の住民の反対で、定期便は飛んでいない。ここまで直接飛行機でツーリストに乗り込まれたら、彼らの商売が上がったりになるからである。荷物運搬やレスキューのヘリが時々飛来するだけだそう。滑走路も舗装されておらず、穴ボコなどが空いていた。この直ぐ上の峠がチョー・ラでゴンパとロッジがある。

ここ迄登って一気に視界が開けた。初めて見るヒマラヤの峰々。中腹には雲が流れていて、その真っ白な頂上だけが青空に浮かんでいる景観は何とも雄大であった。これが世界の屋根というものかと感じ入ったが、ここから見える峰々はまだ70000mにも達せず、謂わばジャンダルムにしか過ぎなかった。

北側に向かって右端には標高はそれ程高くはないが鋸のようなリッジを競り上がらせているクシュム・カングル峰(6370m)、その左はヒマラヤ襞の美しいタマセルク峰(6608m)とカンテガ峰(6685m)、更に左奥にはヒマラヤのモンブラン、アム・ダブラム(6856m)の特異な岩峰、エベレスト方向のイムジャ・コーラ溪谷を挟んで左手奥には真っ白なチョラツェ(6440m)、その手前左には神の山と崇拝されて入山が禁止されているクンビラ(5761m)、その奥にはゴーキョ方面のキョジョリ(6168m)が見える。アマ・ダブラム峰とチョラツェ峰の間に晴れていればエベレストやローツェなどの8000m峰やイムジャ・ツェ(アイランド・ピーク、6160m)が遠望できる筈であるが、残念ながら雲の中であった。



(秀麗なタマセルク峰(右)とカンテガ峰(左))



(ヒマラヤ襞が美しいタマセルク峰 頂稜部)



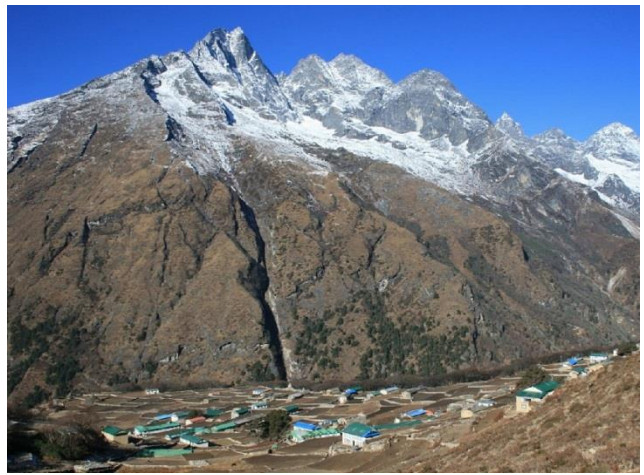
(クスムカングル)



(真っ白なチョラツェ)



(ゴンパとガスの中のアマダブラム峰遠望)



(神の山クンビラ、集落はクムジュン)

タムセルク峰は標高は高くないが、今回のトレッキングで眺めた山々の中で一番姿が美しい山であった。凜と引き締まったピラミダルな双耳峰、カミソリのように切れ込んだ稜線、それに付いているヒマラヤ襷、どれを取っても卓越した山容である。この高度での氷雪の登攀はかなり困難と思われるが、是非一度登ってみたい。ガイドの話ではカトマンズから往復 40 日掛かるとのことであった。これは夢として温めてみよう。

神の山クンビラはドゥードゥ・コシ本流と支流のボーテ・コシ川を分けるクムチェ・ヒマール稜の岩山で、この麓にナムチェやポルツェ・テンガの集落が散在し、ナムチェからゴーキョへの路はこの山麓の南東面をトラバースして行くことになる。“クンビラ”は「金比羅」の語源。今、この駄文を書きながら、書斎の畳の上にカトマンドゥで買った 2 枚の地図(Khumbu Himal<発行ドイツ>、Gokyo<発行イタリア>、何れも 5 万分ノ 1)を拡げて眺めていると、綺麗な彩色や鳥瞰図的に彩られた陰影などが豊かな想像を醸してくれる。目を細めると上空 1 万メートルを飛ぶジェット機の窓からヒマラヤの峰々や溪を俯瞰しているような気分である。

エベレスト・ビューホテルの展望テラスでジュースを飲みながら一服。カラパタールから下って来たアメリカ人の話ではカラパタールは満員の盛況で、エベレストを撮影するにも群衆の耳の間からレンズを向けなければならなかったとのことだった。

その晩はクムジュンに泊まった。ここはかなり大きな集落で、ヒラリーが作ったヒラリー・スクールもあった。ネワール族の子弟教育のための小～高校であるが、ここの卒業生はネパール各界で活躍しているという。集落の中心に大きなゴンパがあり、幾ばくかの寄進をしてイエティの頭皮という代物を見物した。厨子の様な箱に収められていて暗くてよく見えなかったが、眉唾物であろう。泊まったロッジはゴンパも兼ねていて、一日中読経と鐘や太鼓の音が聞こえた。



(クムジュンの村)

クムジュンから、神の山・クンビラ南斜面をトラバースし岩壁下を巻く石段の路を下れば、右下のシャクナゲの叢林と大岩台地の上に一軒家のロッジが見えてきた。真紅のシャクナゲはネパールの国花であるが、真紅に加えて白やピンク、珍しい黄色のシャクナゲも咲いていた。ここはサナサという所で、タンボチェ経由カラパタールへの路が分岐している。

ここを登り切った見晴らしの良い峠がモン・ラ・パスで、丸いチョルテンと 2 軒ほどのロッジが建っている。峠から眺めると、左手にはチョラツェ、タワチェ、正面にはアマ・ダブラム、右手にはカンテ

ガとタムセルクの真っ白な峰々。

トレッキングコースがクンビラの東斜面でドゥードゥ・コシの河床近くに落ち込んでいる場所がポルツェ・タンガで、ロッジの庭にシートを拡げて昼食となる。ここからシャクナゲの咲く樹林の路を3時間ほど進めば、今晚の泊まり地ドーレに到着。日本語が通じる Cho-Oyu Lodge に宿泊。今日のクムジュン〜ドーレ間の行程は結構アップダウンが多くて、獲得高度は 700m くらいになった。夕方から小雪が舞う。前の小川でシャツを洗濯した。水は手が切れるほど冷たいので、シャツの端を石に挟んで流水に揉まれるままにした。ロッジの前庭や裏庭はカルカ(放牧場)になっていて、毛の房々とした大きなヤクが数匹放牧されていた。ヤクは背中に雪が降り積もってもジッ〜と一晩中動かずに立っていて、何やら高山の隠者の風情があった。

翌日はマツチェルモで1泊。ここで最初の2名が高山病でリタイア。



(マツチェルモのロッジと霊峰キャゾ・リ)



(高山の隠者 雪に佇むヤク)

翌々日、いよいよゴーキョに入る。途中一軒屋のロッジがあるファンガという所で更に高度障害の3人がリタイアし、ガイドのマイカルと共に下山。ここは10年程前に雪崩で小屋が潰され明治大学OB隊が遭難死、遭難碑もあった。

ここまでのトレールは、ドゥードゥ・コシ川を挟んで対岸の中腹に付けられたトレールと始終並行に走る。このトレールは、ここファンガでこちら側のトレールに吸収されるが、マオイストの勢力下になっているので、最近是通过トレッカーは少ないらしい。



(お仕事中のヤク)

支尾根上のちょっとした台地や河岸段丘の猫の額などの僅かな平坦地には石積みのカルカが作られており、高山地帯での厳しい生業を偲ばせる。山腹にはそれらのカルカを結ぶ小径やヤクの通り道が縦横無尽につけられていた。しかし、ナバラジによると、この辺りのロッジやカルカの所有者はカトマンズの豪邸に住んでおり、大金持ちだそうだ。好きな場所を自分で勝手に開墾すればよく、その土地には税金も掛からないそうである(開墾した土地が自分の所有地になるのか、借地なのかは聞き忘れた)。500万円あれば立派なロッジが建つそうで、共同で経営しないかと本気なような冗談を言っていた。

ここからはゴジュンバ氷河の上に行く。氷河といっても表面は土砂や岩に覆われているから氷河の感じはしないが、うずたかく盛り上がったモレーンでそれと分かる。谷奥の先に初めてヒマラヤの8000m峰が顔を出した。大きなチョー・オユー8201m峰であった。右岸にある2つの氷河湖を見ながらゆっくりと登れば3つ目の大きな氷河湖ドゥードゥ・ポカリが現れ、その岸に沿って10分も歩けばドゥドー・コシ川最奥の集落である湖畔のゴーキョに到着した。ドゥドー・ポカリは静かで大きな湖で、湖の西側にそそり立つ鋸の歯のようなレンジョ峰(5906m)がひっそりとその影を映していた。高山に囲まれた美

しい湖で、8000m 級峰のジャイアンツも良く見える場所であるから、観光船でも浮かべて豪華なホテルでも作れば高級リゾート地になると思われるが、ここまで観光客が登って来るには高度が高過ぎるのか（標高は 4,790m）、又は神の湖として保存されているのか。ゴジュンバ氷河には氷河湖が多く、この先チョー・オユーBC まで幾つかの大きな湖が点在している。正面の丸い山が今回の最終目的であるゴーキョ・ピーク (5360m) であるが、ガスが掛かって全貌は見えなかった。



（ドゥドーコシ川最奥の集落 ゴーキョの集落）



（ドゥドー・ポカリとレンジョ峰）

明日はゴーキョ・ピーク登頂の予定であるが、ここで更に 4 人の高山病が進行。ガイドのタパは、マツェルモに残留して高山病になったメンバーの面倒を見ているリーダーの K さんからの要請（同所に残留している人の高山病が急激に悪化したのでタパのゴーキョからの下山を求めてきた）で急遽マツェルモに下山（彼はそのまま、高山病が重い女性を徹夜で看護した後、翌早朝救助ヘリを要請し、マツェルモとゴーキョの二人を収容してカトマンズの病院に同行）。

我々は、K さん発タパ宛の夕方ゴーキョ着の緊急伝令に返事を持たせて、高山病がひどくなった

（言語障害の症状が出てきた）一人を緊急下山させるために、K さんに救助ヘリ出動を要請し、翌朝飛来したヘリに送り込んだ。（この伝令は、我々のパーティーの 18 歳のガイド見習い(今はポーター)で、普通の足で片道 5 時間も掛かるマツェルモ～ゴーキョ間を往復 2 時間で飛ばした。なかなか元気で気持ちのいい若者であった。きっと良いガイドになることであろう）

高山病にもならず元気に残っていた 6 人は早朝にゴーキョ・ピークに向かって出発し、登頂を果たしたが、残念ながらエベレスト方面には直前に雲が掛かって頂上からエベレストは見えなかったとのことであった（途中の稜線に出た肩からは見えたそう）。小生は、高山病の人の緊急ヘリ搬送とここゴーキョで高度障害が出てリタイアしたメンバーの経過観察の為に登頂を断念して、ゴーキョに残留した。

この夜もゴーキョ泊まりの計画であったが、高山病の人が多かったために、急遽全員低地に下山するようにとのタパからの緊急連絡が入り、登頂隊が下山してから直ぐにそのままマツェルモに下った。翌日、往路のクムジュン・シャンボチェ経由とは別の路（サナサから直接ナムチェに抜けるトレイル）をナムチェに下ったが、夕方ナムチェの峠（前述のテンジンの記念プレートのゴンパが建っている峠）で、イムジャ・コーラ溪谷の奥に夕陽を浴びて輝くエベレスト（8848m）とその右の双耳峰ローツェ（8501m）の大展望にやっと初めて接することができた。



（ゴーキョ集落からゴーキョ・ピークを見上げる）

エベレストは南壁の岩壁が紅黒く染まり、ローツェはギザギザとした岩壁と氷壁のコントラストが黄金色に染まっていて印象的であった。ゴキョー・ピークへの登頂を断念した小生は、実はここまで下山して初めてエベレストを仰いだ訳である。ここからの遠望では、エベレストは少し奥に位置するために、手前のローツェの方が大きく立派に見えた。



(左：エベレスト、右：ローツェの残照)

ナムチェに帰着してナムチェ滞在組みと再会。病人を何人も抱えて自分も調子が良くなかったリーダーのKさんは大変な苦勞をされたようだ。診療所でガモウバッグに入った人の看病でタバと共に徹夜であったらしい。また、自己中心的な人も居たようで、人間関係の調整でも苦勞が絶えなかったらしい。

1日分余裕ができたので、ゆっくりとナムチェに2泊して、朝夕はエベレストを見に軍隊の警備基地がある丘に登ったり、博物館を訪ねたり、前述のバザールを見たりして過ごした。



(ナムチェの丘から左：タマセルク、右：カンテガ)



(ナムチェの丘の博物館兼ホテル)

博物館 (National Park Museum) は警備基地の下にあり、古い仏具や民具の展示があったり、ヒマラヤの写真のスライドショーがあったり、また写真館には今までに活躍したシェルパの写真も飾ってあったりした。建物はホテルにもなっていて小奇麗で静かなホテルのようだったが、誰も泊まってはいないようだった。態々ここまで登ってきてホテルに泊まる人は少ないのであろう (Hotel Sherwi Khangba)。

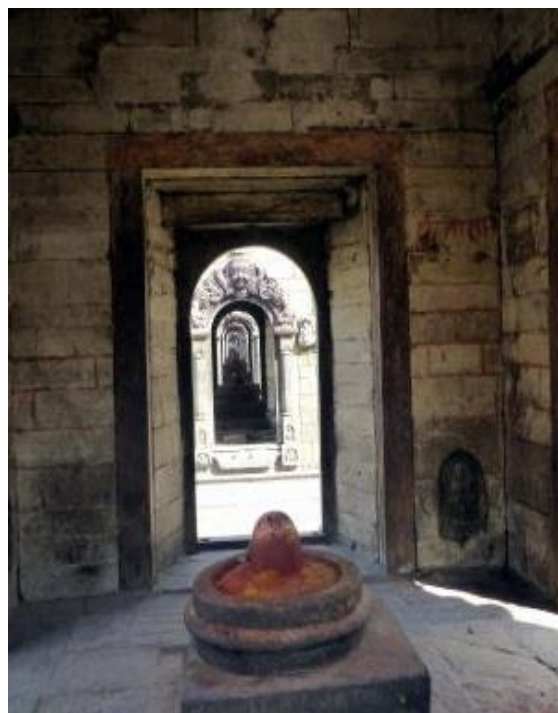
ナムチェではレストランで試みに水牛のステーキなるモノを喰ってみた。残念なことにミンチ肉になっていて美味しくも珍しくもない代物であった。また、メンバーの某さんが面白いものがあると本屋に案内してくれた。極彩色で印刷された Kama Sutra であった。発行はシンガポールで、各国語に翻訳されている。Kama Sutra はインドの秘典で、精神の解脱には肉体の往生が欠かせないと説くアリガタイ教典である。勉強中のエスパニョルを更にブラッシュアップするためと称してスペイン語バージョンを購入。描かれている印度人男女の姿態と表情が実に素晴らしい一品であった。哲学と瞑想、恍惚と解脱。哲人のエロスは斯くやと思わせる。コレはもう芸術作品であるナ。「眠られぬ夜のために」蒲団に潜り込んでニヤニヤしながらしかも厳かに秘かに芸術を楽しむというのはどうじゃ。もうワクワクしてくるナア。宗教心皆無の我が家の鬼共の目に触れれば、没収された上に獄門磔の刑に処せられるのがオチであるから、机の引き出しの奥深く隠蔽しておいて、秘かに拝むこととイタそう。

ルクラまで下って更に一泊。ルクラは昼間は普通の集落であるが、夜は戒厳令でも敷かれたような気配であった。21 時頃、バーでも開いていないかとホテルを出てみたが、メインストリートは真っ暗で人っ子一人歩いていなかった。歩き始めた途端犬が何匹も吠えかかってきて、急に丘の上からサーチライトがこちらに向かって点灯され、度肝を抜かれた。丘の上には数人の男がいるようだった。銃で射殺されるかと思った。後で聞いたら夜間は戒厳令が敷かれていて、軍隊がマオイストのテロを警備しているのだそう。犬は軍用犬だった。そういえば、ナムチェの丘でも何故こんな静かな所に軍隊が駐屯しているのかと疑問に思ったし、エベレスト街道では軍隊が屯したり、訓練をしていた。ゴーキョへのトレッキングコースは比較的マオイストからは安全だと聞いていたが、この辺りはやはり警戒地域になっているのであろう。因みにマオイストと称する集団には、本当の政治結社である「毛沢東派」でも何でもなく、単なる山賊や強盗の集団もいるらしい。

翌朝飛行機でカトマンズに戻り、その翌日はタパとナブラジの案内で貸し切りバスで市内観光をした。最初に訪ねたのはパシュパティナート寺(Pasupati Nath Holly Area)であった。ネパール最大のヒンドゥー教寺院で、ガンジス河の上流パグマティ川が真ん中を流れている。大小の伽藍が林立し、祀神であるシヴァ神の男根がパールヴァティー妃神の女陰の上に配置された彫刻が祀ってある小さな堂宇が数限り無く建っている。陰陽の彫刻は高度に抽象化されていて、さすがにヘンなことを想像する余地は無く、ヒンドゥー教の深遠な淵を観るばかりであった。



(リングとヨニ)



(リングとヨニが祀られている小さな堂宇が →
一列に数限りなく並んでいた)

パグマティ川の上には多くの露天火葬台が川の上に突き出していて、この日も 3 つの火葬台から煙が上がり、真っ赤な炎も見えた。火葬台の形には上流側の四角形のものと下流側の丸いものがあり、四角

は偉い人用、庶民には丸形を使うのだそうだ。さらに上流には王室専用があるという。火葬をしている直ぐ傍では猿の大群がお供え物を奪い合ったり、大勢の人々が沐浴をしていた。乞食が遺体の衣服を奪い合うともいう。お供えや遺灰が流れている茶色の川は聖なる川であり、ヒンドゥー教の人々はここで沐浴したり、食器を洗ったり、洗濯をする。ここはヒンドゥー教信者にとって有数の聖地でネパール各地からは勿論のこと、遠くインドからも巡礼者が訪れるという。中心部の本堂などにはヒンドゥー以外の人は入れない。



(パシュパティナートの火葬風景)



(同 沐浴風景)

伽藍は多くの人々で混雑していた。また土手の上では家族が集まって車座になり法要などをしていた。手や顔や足が半分溶けた乞食も道端に座って喜捨を受けていた。上半身裸で特異な風貌をして歩き回っている行者も多い。これを団体で見に来た外国人観光客が珍しそうに眺めているが、ヒンドゥーの信者はこれらの観光客には全く関心が無いようであった。ただ、観光客目当ての土産物屋(仏画、仏具、仏彫、神面や、数珠、ネパール文様の小袋、アンモナイトの化石など。如何にも所謂エアポート・アートという類が多い)が煩く付きまとうだけである。

このような光景はインドの写真集などで知ってはいたが、実際に火葬や沐浴の現場を見ると、やはりちょっとしたカルチャーショックであった。火葬の煙にも異臭がしたように感じられた。

ちょっと重い心になって、次に連れて行かれたのはボダナート寺院である。ネパール最大のチベット仏教寺院で日本でも「目玉寺」として知られている。伽藍の中央には大きなドーム型の半円球の基段の上に方形の黄金色の光塔が天に突き上げており、その一番下の部分の四方に例の大きな目玉が描かれていて、民の生活を見通しているのである。塔の天辺と地上は数条のチョルテンで結ばれており、民意はこのチョルテンを伝わって仏に届くと言われている。基壇の廻りにはマニ車が張り巡らされている。その周囲には、灯明の店(ローソクを売ってそれに点火させ、机の上に灯明の海ができる)、仏具、仏画、絨毯、数珠、面、仏彫などの店が円形に軒を連ねていた。たまたま今日はネパールでのお釈迦様の誕生日(日本では4月8日であるが、ここでは5月4日)に当たっていたので、これを祝う信徒のパレードで大混雑していた。

午後からは、ネパール第二の都市である古都・パタンを廻った。ネワール族の王によって2世紀に建設された



(目玉寺 ボダナート寺院)

この古都は 15 世紀頃は独立した王国として繁栄した。別名をラトプールというが、これは「美の都」という意味だそう。如何にも時代を感じさせる古びた多くの伽藍が街中に建てられており、柱や屋根を支える斜木には精巧な木彫の仏像が何千体も彫刻されている。ここもお釈迦様生誕記念日の行列で賑わっていた。民族や地域や団体毎の山車が宗教音楽らしきものを演奏しながら練り歩いており、これを見物する人が通りに並んだ建物の二階や三階の住居の窓から覗いている。世界文化遺産。



(パタンの水売り)

(←パタンの伽藍)

ここに限らず、ネパールの盛り場はどこでもそうであるが、人混みの匂い、ネパール人の身体から発生する匂い、山羊や羊を犠牲にした血の匂い、それを仏像に塗り付けた匂い、牛糞の匂い、人糞の匂い、香辛料の匂い、家屋から匂い出る得体の知れない匂いなどなど、ちょっと我々が匂ったことが無いような匂いが漂っていて、やるせない。

これでもかこれでもかという数多の伽藍や仏像はもう見飽きたという頃、最後の観光地・旧王宮広場(ハヌマン・ドカ、Hanuman-dhoka)に連れて行かれた。ハヌマンとは、猿猴のことで、旧王宮の入り口に犠牲の血か塗料かで真っ赤に塗られた猿神の像があることからそう呼ばれているそう。よくネパールの写真集などに載っている彩色豊かなカル・バイラブ像(シヴァ神の憤怒像)では地元の人であろうか、何人もの人が祈ったりお供えを捧げたりしていた。また、広場には端正なガルダ像もあった。どこの寺院や街角のゴンパでもそうであるが、奇妙な顔の怖い神様や怒った動物の顔をした神様と並んで端正な顔をした仏様が同居しているのがネパールの面白いところである。この街角のどこかの寺院に有名な合体仏(歓喜仏)の像がある筈であるが、もう見疲れて探す気が失せた。



(ハヌマン・ドカのカル・バイラブ像)



(同 端正なガルダ像)

クマリ(生き神)館にも入ってみたが、クマリだという普通の幼い少女がチラッと窓から顔を出してすぐに引っ込んだ。クマリとは、特定の高貴な家柄に生れた少女を生き神としてこの館で教育し、祭りなどの最高司祭として王家はじめ全国民から崇められる存在であるそうだが、所詮異教徒の私には、金(donation)を取って見せる盛り場の見せ物小屋のようにしか感じられなかった。

やはり、平生見慣れていない異種の文化を雑踏の中を歩き回って一日中見ていると、精神的にもクタクタに草臥れてきた。やっとツアーから解放されてホテルに戻り、一風呂浴びてから現地ガイドとのお別れ夕食会をした。私の希望で生粋の現地料理にして貰い、ネワール風建築の店でネワール料理を食べたが、山中では高山病や下痢(殆ど全員が急性下痢で苦しんだ)とは全く無縁であった小生もカトマンズに戻ってから風邪気味になったのか、食欲が全然無かった。

深夜 23 時半出発予定のロイヤルネパール航空機は 5 時間程遅れて離陸(これは前述のような予約客不足によるものではなく、前日の 5 月 4 日に日本を襲った暴風のために日本出発便の時間が大幅に遅れ、従ってカトマンズ到着も大幅に遅れたことによるものらしい)、7 時間半程中国大陸の上空を飛行した後、上海経由で関空に夕方帰着。2 週間にわたる初めてのヒマラヤとネパールの旅を終わったのであった。

企画してくれた K さん、出発前の準備や現地との交渉から帰着後の保険のお世話まで、誠にお疲れ様でした。多謝。現地ガイドのデリップ・タパさん、ナバラジ・ポーデルさん、マイカルさん、参加者の皆さん、ありがとうございました。

Dhanyabad & Namaste!!

【追記】

今回ガイドしてくれたディリップ・タパが 2004 年夏来日。拙宅にも 2 泊して、鎌倉や横浜を案内したり、居酒屋で呑んだりして楽しかった。また都岳連・個人会員 10 周年記念集会でヒマラヤトレッキングの講演もして貰った。来年はイムジャ・ツェ(アイランドピーク)を案内するから、是非再訪してくれとのことで、今から楽しみにしている。小生にとってのヒマラヤは、エベレスト登頂は金力的にも体力的にも不可能であり(公募ツアーは 800 万円)、また、金と引き換えに固定ザイルで引っ張り上げられるようなタクティックスには何の興味もないが、今回のトレッキングで眺めたタマセルク峰とアムダブラム峰には強い魅力を感じており、相当に手強い相手であろうが、できることなら何とか登ってみたい。この前段としてもイムジャ・ツェには是非登りたいものである。(2004 年 9 月 追記)

【追々記】

2006 年の秋、念願叶ってイムジャ・ツェに出掛けた。エージェントを再びディリップ・タパ氏に頼もうと現地にメールや電話を何回もしたが音沙汰無しで、別なエージェントに頼んだ。この時、彼の消息を尋ねたがカトマンズにあった事務所は既に無く、別なガイドの話ではアメリカに渡っているらしいとのことであった。

イムジャ・ツェの紀行は「マイッタ、参った ヒマラヤ イムジャ・ツェ峰」をご覧ください。

(2006 年 1 2 月 追々記)

(本稿 完)

[⇒「遙かな山々 私の山旅・海外編」目次に戻る](#)